

Title	リカアドの價值論に就て(二・完)
Author(s)	森, 耕二郎
Citation	經濟論叢 (1924), 19(6): 908-924
Issue Date	1924-12-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/128227
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號 六 第 卷九十第

行發日一月二十年三十正大

論 叢

營業税の不公平可能……………法學博士 神戸 正雄
 獨占の本質……………文學博士 高田 保馬
 道德統計論概説……………法學博士 財部 靜治

時 論

在滿朝鮮人の現状と其の救済策……………法學博士 末廣 重雄
 食糧問題と朝鮮の米作……………法學博士 河田 嗣郎

說 苑

リカアドの價值論に就て……………經濟學士 森 耕二郎

雜 錄

我國に於ける正貨の増減と金融繁閑との關係……………經濟學士 小川 福太郎
 近世の農家經濟……………經濟學博士 本庄 榮治郎

附 錄

本誌第十九卷總目錄

說苑

リカアドの價值論に就て (二・完)

森 耕二郎

目次 緒言 第一 所謂『相對價值』(以上前號掲載) 第二 勞働の意義 結論

第二 勞働の意義

一

前節に於て私は、リカアドの勞働價值論が、主としてマルクスの所謂交換價值若くは價值の表現形態に關するものであり、而もリカアドの所謂相對價值は、交換價值として不完全なるのみならず、それは交換價值の内容實體を成す所の價值の本質に觸れるところ少くして、勞働價值として猶ほ極めて粗朴なるものであることを、一般的に述べた。而してこのことは、彼れの所謂相對價值の内容構成に與かるところの、勞働の概念に就ての彼れの未熟なる見解を檢討することにより、甫めて明瞭に理解することができらうと思ふ。私はこの節に於て、彼がこの勞働の

性質に就てなほ如何に正しき理解がなかつたかを、勞働の質的量的の二方面から吟味するであらう。

抑も經濟價値の眞相は、經濟價値は自然科學的範疇ならず、社會科學的範疇でなければならぬと云ふ觀點に立つて、甫めて捕捉し得らるゝであらうと云ふことは今更申す迄もない。しかるにリカアドの相對價値の概念は、この觀點より見てなほ不充分なるものであつて（それでもそれ迄の勞働價値論では最良のものであるが）、彼が謂ふ所の價値概念は、社會科學的範疇たるより尠からぬ隔りを有つてゐたのであるが、この彼れの價値概念に對する不充分なる態度は、彼が相對價値の構成内容を成すところの勞働に附する意義に於て明白に現はれてゐる。それで私は次に彼れのこの勞働の概念に對する態度が、如何に個々の自然科學的であつて、社會科學的でなかつたかを、マルクスのこの點に就ての態度——それは勞働の、隨つて價値の、社會的性質を最も明確に把握せるものである——を顧みつゝ、特に若干吟味して見やうと思ふのである。先づ第一に勞働の質的方面から見ると。

リカアドは、さきにも述べたる如く、貨物の相對價値を論ずる場合、主として一貨物の生産に要したる勞働の分量の、他の貨物の生産に要したる勞働の分量に對する相對的量的關係のみを考慮したるものであつて、勞働の質的等一性を明確に意識するところがなかつた。言葉を換へて言へば、彼は、主として一つの交換關係の下に立つところの貨物の生産に費されたる個々勞働の質的差異をそのまゝに認めて、その量的比例關係のみを云爲したるに止まり、その個々勞働を、そ

の間に共通なる、互に通約し得る等一性を有つてゐる或る種の勞働に還元したる後、その量的比例的關係を云爲したのではないのである。彼は言ふ。

『しかし乍ら、勞働を總ての價值の根源なりと論じ、而して勞働の相對的分量が、殆んど例外なく、貨物の相對價值を決定するものであると云つたからとて、私が、勞働に種々の質的差異あること、および一の仕事に於ける一時間又は一日の勞働を、他の仕事に於ける同じ持續期間の勞働と比較することの困難なることを、看過してゐると考へられては困る。勞働の種々異なる質の評價は、直ちに市場に於て、十分正確に總ての實際上の目的に合するやうに按排せられ、而してそれは多く勞働者の比較的熟練および爲されたる勞働の烈度如何によつて定まる。一度この段階が定まるならば、それは殆んど變動を受けないものである。若し玉工の一日の勞働が、普通の勞働者の一日の勞働よりも價值ありとせば、その勞働は、長き以前より、價值の段階に於ける適當の位置に按排され且つ配置され來つたのである。』

『それ故に時期を異にして同一貨物の價值を比較するには、その特定貨物の生産に要したる勞働の相對的熟練および烈度を考慮することは、殆んど必要はない。盖し勞働は兩時に於て同様に作用してゐるから。或る時に於ける或る種の勞働が、他の時に於ける同種の勞働に比較される、若し勞働が $1\frac{10}{15}$ 或は $1\frac{1}{4}$ 増加せられ、又は減少せられたならば、それに比例せる結果がその貨物の相對的價值の上に起るであらう。……』

『私が讀者の注意を惹かんとする所の研究は、貨物の相對價值の變動の結果に關するものであ

つて、その絶對價値のそれに關するものでないから、異なる種類の人間勞働が評價されるその比較的程度を吟味することは、餘り重要ではないであらう。……』

これらの章句に於ても現はれて居る如く、彼は、相對價値の決定に關して、全然勞働の異質、熟練、烈度などを考慮の外に置いたのではなくして、或る貨物が一の交換關係に立つ場合、各々それが生産に要したる種々なる勞働が、互に或る一定の性質に於て或一定の關係に立つことを認めてゐたのであるが、そうして彼が勞働を交換價値の内容實體とする限りしかせざるを得ないのであるが、しかしこの勞働の質的統一性に就ての觀念は、彼に於ては、極めて不充分に、ホンの僅かの程度若くは彼れの無意識の裁に於て、現はれてゐるに過ぎない。彼は價値問題はそれを必要とせぬと思惟したのである。かくて彼が意味する勞働は、玉工勞働、製織勞働の如く、個々の具體的勞働であつて、普遍的等一的共通勞働ではないのである。しかし乍らかくの如きリカアドの勞働の意義に對する態度を以てしては、到底社會的、普遍的なる交換價値、價値を説明するに足らぬものなることは明らからう。(註)

(註) アダム・スミスはリカアドと異なり、價値形成的勞働の性質を普遍的に決定せんとしたが、しかしその勞働の普遍性平等性は、社會的立場から客觀的に決定せられずして、個人的立場から主觀的に決定せられてゐる。この點に關する彼の言葉を左に引用する。

『總ての時と所とを通じ、同一量の勞働は勞働者にとつては同一の價値を有つてゐると言つてよい。健康、力、及び精神の正常な狀態の下に於て、熟練と器用との正常な程度の下に於て、彼は同量の安樂、自由、幸福を常に犠牲にせねばならぬ』¹⁾ しかるに既に述べたるが如く、異なつたもの、大小は、それを同一の單位に約元して見て、始

- 1) Ricardo, Principles of Political Economy & Taxation, Gonner's ed. pp. 15-6. (堀學士譯本二七—三〇頁)
- 2) cf. Ricardo. ibid p. 268-9. (同譯本二八五一六頁)
- 3) Smith, Wealth of Nations, Cannan's ed. Vol. I, p. 35.

めて量的に比較し得らるゝのであるが、マルクスは總ゆる勞働を、價值構成に關する限り、抽象的人間勞働なる等一物に還元したのである。この抽象的人間勞働は、單純、同質、同種、普遍的勞働 (einfache, qualitätslose, unterschiedslose, gleichförmige, allgemeine Arbeit) であつて、使用價值生産の目的のために支出せらるゝ具體的有用的勞働に對立せしめられ、たゞそのみが價值構成實體を成す。この人間勞働とは、總ての普通人が平均的に特別の發達なしに、その身體組織の中に有する單純勞働力を支出することである。勿論この單純なる平均勞働それ自身は、國を異にし、文化紀元を異にするに従つて、その性質を變更するものではあるが、しかし一定の社會に於ては一定してゐると彼は云ふ。

マルクスは、リカアドを始め正統學派のものは、この勞働に二重性のあること、随つて又價值の内容構成に與かる所の勞働が、抽象的人間勞働であることに氣附かなかつたことを指摘して左の如く言つてゐる。

『一般に價值に關しては、正統學派は何處に於ても、明白に、又明瞭なる意識を以て、生産物の價值に表現する勞働と、その使用價值に表現する限りに於てのその勞働とを區別して居らぬ。勿論事實上に於ては、彼等はそれを區別して、勞働を或る時は量的に、或時は質的に觀察してゐる。しかし諸勞働の單に量的なる差異が、その質的一致或は等一を、即ち抽象的人間勞働への約元を、前提するものであることは、彼等の思ひ及ばざりし所である』¹⁾

社會的行程が異種の勞働に對して、強制的に客觀的平等性を具有せしむる事實よりして、マル

1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksaus. S. 43—4 Note, (高昌氏譯本第一卷第一冊九四頁註)
2) Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 42.

クスが、價值の構成内容として、右述べたる抽象的人間労働の概念を持ち來つたことは、労働價值論の歴史に於ける一大進歩を示すものであつて、それは彼れの價值論が、從來の労働價值論と根本的に分別せらるべき基本的理由を成す。而してこのマルクスの態度は、吾々をして、マルクスの價值論が、社會的經濟價值としての労働價值の本質を、最もよく説明するものであらうことを考へさせるのである。フランチ・ベトリ¹⁾が、リカアドの價值論は自然科学的、發生的立場を脱し得ないに對し、マルクスのそれは獨逸理想主義哲學を離れて理解せらるゝことが出來ないこと云ふのは（この解釋の當否は別問題）、又この點に關するマルクスの態度を顧みてのことである。

二

次に社會價值としての労働價值の内容實體を爲す所の労働の分量、即ち價值内容の量的測定について、リカアドが如何なる見解を抱いてゐたかを見るであらう。而してこのことを瞭らかにすることによつても亦、リカアドの所謂相對價值が、社會的普遍的労働價值として、如何に不充分のものであつたかを知り得るであらうと思ふ。リカアドに依れば、一定種類の貨物の相對價值は、それが生産に費されたる相對的労働の分量によつて決定せらるゝものであるが、この労働の分量は、その個々のなる貨物の生産に各々費されたる労働²⁾でなきは勿論、其種類の貨物の中に於て、社會的平均的條件の下に於て生産せられたる貨物に投せられたる労働の分量（平均労働量³⁾）でもなく、又最も好條件の下に於て生産せられたる貨物に投せられたる労働の量（最小労働量）でもなく、それは最も好合惡るき條件の下に於て生産せられたる貨物に投せられたる労働の分量（最

- 1) Petry, F., Der soziale Gehalt der Marxschen Werththeorie, 1916, S. 15.
- 2) この見解をとるもの例へば Petit の如し、Petit, Etude critique differents theorie de la valeur dans l'échange interieur, Paris, 1897, p. 89-90. (Tugnon. La valeur d'après les économistes anglais et français, 1921, 95に據る)
- 3) この見解をとるもの例へば Denis 及び Patten の如し、Denis, Histoire des systemes économiques et socialistes, Vol. II, p. 153-4. Patten, The Interpretation of Ricardo, 1893, Essays in Economic Theory, 1924, p. 155.

大勞働量) であるとせられてゐる。彼はこの點に就て左の如く言つてゐる。

『すべての貨物——それが製造品であらうと、鑛産物であらうと、土地の生産物であらうとを問はず——の交換價值は、常に、極めて好都合なる、而して生産の特殊利便を有する人々によつて、獨占的に享受さるゝが如き事情の下に於て、それらのものを生産するに足りるであらう所の、より、少い勞働の分量によつて左右せらるゝのではなくして、かゝる利便を有せざる人々によつて、即ち最も不利なる事情——即ち所要量の生産物を得るがために生産を行ふことを必要とする最も不利なる事情——の下で、それらのものを生産し續くる人々によつて、その生産に必然的に費されたる、より、多くの勞働の分量によつて左右せらるゝのである』。

この命題は、所謂リカアードの地代理論の出發點を成すのであるが、任意に増加することの可能なる貨物の價值が、果してかゝる限界的勞働の分量に依つて決定せらるゝものであるかは、容易に首肯することができない。彼がこゝに謂ふ所の交換價值は、寧ろ生産價格であつて、價值ではない(彼は價值の概念と生産價格の概念とを混同した)。而もそれは獨占的な生産物の生産價格である。他方ドゥニー、バッチンの解する如く、リカアードが貨物の交換價值が平均的勞働に依つて決定せらるゝとしてゐるが如き所がないでもない。そうしてこの場合には彼は價值に就て云つて居るのである。このリカアードの曖昧なる態度は、彼が非獨占的な一般工業的生産物に對して妥當するところの價值法則と、獨占的な農産物其他に對して妥當する所の(生産)價格法則との間に横はれる相違點を克く辨別せざるに出づるものではあるまいか? 即ち彼は、貨物生産の獨

1) Ricards, ibid. p. 50. (同譯本九九頁)

2) Ricardo, ibid. p. 50 (同譯本九九——一〇〇頁)、右の引用文に續く章句を見よ。

占と非獨占、ならびに價值法則と(生産)價格法則との各々の本質に就て明確なる理解がなかつたのではあるまいかと思はれるのである。かくて貨物の價值を決定する所の勞働の量的概念に就てのリカアドの見解は、社會的普遍的勞働の内容構成に與る所の勞働の分量に就ての説明として、未だ充分なるものであると云ふことができないのである。

しかるにマルクスは、この點に關してもリカアドより離る。即ち彼によれば、商品の價值を決定する所の勞働の分量とは、社會的に必要なる平均勞働の分量(時間)である。左にこの點に就ての彼れ自身の詞を左に引用して見やう。

『商品界の總ての價值のうちに表現される、社會の總勞働力は、無數の個人的勞働力から成り立つてゐるが、こゝでは總て一樣なる人間勞働力と看做される。而してこれ等の個人的勞働力の各個は、それが社會的平均勞働力たる性質を有し、又かくの如き社會的平均勞働力として作用し、隨つて一商品の生産に於て單に平均的に必要なる、若くは社會的に必要なる勞働時間のみを必要とする限り、いづれも皆同一なる人間勞働力である。而してその社會的に必要なる勞働時間 (gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit) とは、現在の社會的標準的生產諸條件と、勞働の熟練および能率の社會的平均程度とを以て、何等かの使用價值を表現するに要する勞働時間を指す』。

この社會的に必要なる勞働の分量なる勞働の量的觀念は、抽象的人間勞働なる勞働の質的觀念と密接なる關係があつて、互に離れて考へられないものであるが、茲にはたゞこの勞働の量的觀念に就てのマルクスの主張のみを見んに、彼に依れば、右の章句が示す如く、商品の價值は、リカ

アドに於けるが如く、最も惡い生産條件の下に生産されたその種類の商品の價值(最大勞働量)によつて定まるのではなくして、その商品の生産に社會的平均的に必要な勞働の分量によつて決定せらるゝのである。而してこのことは、マルクスが價值即ち絕對的價値の決定に就て云つてゐるものなることは勿論であつて、彼は、現實の場合(資本主義社會の外面的現象)に於て、商品の市場價格が種々の場合——商品の大部分が、標準的中間的なる社會的平均生産條件の下に生産せらるゝ場合、或はその反對に、右の社會的平均生産條件よりより、不良なる生産條件の下に生産せらるゝ場合、或はその反對に、それが右の社會的平均生産條件よりより、良好なる條件の下に生産せらるゝ場合——に應じて、種々なる勞働の分量により決定せらるゝものなることを説くのである。²⁾ この商品の價值決定に與かる所の勞働の分量を社會的に必要な勞働の分量であるとなすことは、社會的普遍的なる經濟價値の説明として、正に當然であると云はねばならぬ。(註)

(註) マルクスはリカアドのこの點に關する立場に就て、左の如く批評してゐる。

『されば地代の研究に附隨してストルヒとリカアドとの間に生じた論争——即ち市場價値(と云ふよりは寧ろ彼等の謂ふ所では市場價格又は生産價格)は、最も不利なる條件の下に生産された商品に依つて、調整されるか(リカアド)、それとも最も有利なる條件の下に生産された商品に依つて調整されるか(ストルヒ)との論争(問題の性質上論争と云ふに過ぎぬ。事實に於ては、雙方とも相手に就ては何等顧慮するところがなかつた)——は、畢竟雙方とも當を得て居り、雙方とも當を得て居らぬと云ふこと、ならびに雙方とも中間的の場合を顧慮しなかつたと云ふことになる。……』³⁾

猶ほリカアドにありては、總ゆる勞働は價值生産的であるとせられてゐる。即ち彼によれば、價值決定に與かる所の勞働は、直接的勞働(勞働それ自身)ならびに間接的勞働(機械、器具、工

1) 彼にありては寧ろ市場價値

2) Marx, Das Kapital, Bd. III, 1, S. 161, ff. (高島氏譯本第三卷第一册三一頁以下) od. Theorien über den Mehrwert, Bd. II, Teil I, S. 45 ff.

3) Marx, Das Kapital, Bd. III, 1, S. 162 Note. (高島氏譯本第三卷第一册三二二頁註)

場其他に含まれる勞働)を含んでゐるのであるが、それらは、單に貨物の生産に費されたる勞働のみならず、それが分配交換に於て費されたる勞働をも意味してゐる。彼は云ふ。

『更にもつと進歩の行はれ、工藝や商業の盛んな社會に就て觀察するも、やはり財の價值は、この原理に従つて高低するを知るであらう。例へば靴下の交換價值を測定するに當り、吾々は、その價值が他物との比較的關係に於て、其製造に、其市場への運搬に、必要なる全勞働量の多少に依つて定まることを見るであらう。第一に、生綿を栽培する土地の耕作に必要な勞働がある。第二に、綿を靴下の製造さるべき國に運搬する勞働——それは、その綿を運搬する船舶の建造に費されたる勞働の一部を含んでゐる、そしてそれは貨物の運賃として課せられる——がある。第三に、紡績工および機械工の勞働があり、第四に、靴下の製造を補助する建物および機械を建造したる技師、鍛冶屋、及び大工の勞働の一部分がある。第五に、小賣商人、その他これ以上一々擧げる必要のない多くの人々の勞働がある。これ等各種の勞働の總計が、これらの靴下が交換さるゝ所の他物の分量を決定すると同時に、此等他物に費されたる勞働の種々なる分量に關する同一の考が、これ等の物の如何なる分量が靴下と交換として與へらるべきかを、同様に支配するであらう』。

即ちリカアドは、靴下の生産それ自身に費されたる勞働なると、それが分配、交換に費されたる勞働なるを問はず、それらは一樣に靴下の價值決定に參與するものであるとなすのである。

しかるにマルクスにありては、その謂ふ所の價值生産的勞働は、リカアドと同様に、間接勞

働、直接労働を含んでゐるが、それはたゞ商品の生産に費されたる所の労働のみを意味するのであつて、商品の分配、交換などに費されたる労働は、價值構成に與らないものとして、價值生産的労働より除外されてゐる。この商品の分配、交換に於て費されたる労働——商人、運送屋などの労働、商業、交通に使用せらるゝ諸什器、建物、機械等に含まるゝ労働など——に對する報酬は、マルクスに従へば、商品の所謂生産費を成すのであるが、それは、商品の生産によつて發現したる所の價值の分配に與かるにすぎない。それは價值よりの控除(Abzug)なのである。左にこの點に就てのマルクス自身の詞を若干引用して見やう。

『商品取引は、資本家の手に依つて廣大なる範圍を占むるものであるが、かゝる原因によつて、この、價值を造り出すことなく、單に價值の形態轉化を媒介するにすぎざる労働が、價值造出的の労働に轉化し得るものでないことは云ふ迄もない』。

『この場合、流通費用の有らゆる細目(例へば荷造、品別などの如き)について述べる必要はない。普遍律たる事實は、商品の轉形にのみ基く一切の流通費用は、商品に何等の價值をも附加するものではないと云ふことである。かくの如き流通費用は、價值の實現又は一つの形態より他の形態への價值移轉に伴ふ費用にすぎないのである。この費用に投せらるゝ資本(それに依つて支配せらるゝ労働をも含む)は、資本制生産に伴ふ失費の範圍に屬するものである。かゝる費用は餘剩價值の中から回收されねばならぬものであつて、資本家的階級全體の立場より見れば、餘剩價值又は餘剩生産物からの控除を意味する。……』²⁾

1) Marx, Das Kapital, Bd. II, S. 101. (高島氏譯本第二卷第一冊二一八頁)

2) Marx, a. a. O., S. 120. (同譯本同冊二五七——八頁)

かくマルクスは、價值は獨り生産行程より出づるものであつて、流通行程より出づるものではないとしてゐるのであるが、この彼れの立場は、彼れの價值概念が普遍的社會的なる絶對的價值概念なるより來る當然の歸結であるであらう。而してリカアドが價值形成的勞働の中に、分配及び交換の範域に於て費されたる勞働をも意味せしむることは、彼が價值の概念と生産價格の概念とを混淆し、隨つてマルクスの謂ふが如き絶對的價值の概念を明確に把捉することができなかつたことの一の現はれなのである。

結 論

以上述べたる所により、私は、リカアドが謂ふ所の交換價值、即ち相對價值が如何なるものであるか、それは普遍的社會的經濟價值としての勞働價值として如何に不充分なるものであるか、隨つて又彼れの相對價值の内容を成す所の勞働の概念が、如何に普遍的社會的なるより隔つて居り、經濟價值の構成内容として支持せられ得ないかを、大體瞭にするを得たかと思ふ。

惟ふにリカアドは、價值研究の對象として、貨物の個々人に對する關係、即ち效用、使用價值を措き、貨物を介しての人と人との社會的關係としての交換價值を選ぶのみならず、貨物の中に就て、勞働に依つて任意に増加し得べからざる貨物、即ち稀少性を有する貨物を、其研究の對象より除外し、たゞ貨物の大部分を占める所の、勞働によつて任意に増加し得べき貨物を取扱ふのであり、而して彼はその種の貨物に就て、一般的なる價值法則を見出さんとするのであるから、

彼れのこの態度は、彼に於て問題となるのは個々人若くは個々經濟にあらずして、社會團體若くは社會經濟であり、顧慮に値ひるのは、個別的偶發的主觀的現象にあらずして、標準的普遍的社會的現象でありとする立場に立つてゐることを意味してゐると云ふことが出来るであらう。故に彼れの研究對象は、個々のなるよりは、寧ろ社會的なるものであつて、經濟學の研究對象として、當に妥當なるものであると云はねばならぬのであるが、その研究の方法に至りては、猶ほ多分に自然科學的、技術的立場を脱することが出来ずして、經濟價值の社會的性質を充分瞭らかにすることが出来なかつた。自然法の存在を信じ、社會制度の永遠的持續に何等疑を有たなかつた正統學派一般に通ずる立場からしては、彼れのこの態度の由つて來る所も容易に領かれるのである。(註)

(註) 經濟價值としての勞働價值の社會的性質を高調し、明確にしたのは云ふ迄もなくマルクスであつて、この彼れの態度は、既に述べたる所により(例へば、抽象的人間勞働と云ひ、社會的に必要なる勞働時間と云ひ)ほぼ推測し得らるゝのであるが、猶ほ彼は隨所に於て、價值の、隨つて又價值形態の、社會的性質を瞭らかならしむるに努めてゐる。今左にこの點に就ての彼自身の詞を二三引用する。

『……商品の感性的に粗造なる對象性と正反對に、その價值對象性の中には、自然物質の一點一粒も這入らぬ。されば個々の商品を如何に捻つて見ても、それは價值物としては依然として摺み所がない。しかし乍ら若し吾々が、諸商品は、たゞ同じ社會的單位の、即ち人間勞働の表章である限りに於てのみ、價值對象性を有すること、隨つて又諸商品の價值對象性は純社會的のものであることを思ひ浮べるならば、この價值對象性は、商品對商品の社會的關係に於てのみ現はれ得るものであることは自明である。……』

1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksaus. S. 14—5. (高島氏譯本第一卷第一冊 二八頁)

『しかし類似はこゝで終る。織は棒砂糖の月方の表章に於て、この兩物體に共通なる自然的性質、即ち重さを代表する。しかるに上衣はリンネルの價值表章に於て、この兩物體の超自然的性質を、價值を、即ち純社會的のものを代表する』¹⁾

『これに反して、商品形態、及びそれが表現される勞働諸生産物の間の價值關係は、それらの勞働生産物の物理的性質およびそれより生ずる物的諸關係とは絶對的に没交渉のものである。この場合、人類の目に物々關係の幻燈的形態を帶びて現はれるものは、たゞ人類それ自身の間の一定の社會的關係に外ならぬ。……』²⁾

かゝる不充分なる立場乃至研究方法をとれる彼は、その結果として、價值と(生産)價格との關係に就て頗る不明確にして、誤謬に充ちたる見解を抱くこととなり、遂に彼れの勞働價值論に一種の修正を施さざるを得ざるに至つたのである。

既に述べたる如く、彼は價值の問題として、所謂相對價值を取扱ふことにより、たゞ單にマルクスの所謂價值の現象形態、交換價值を説明せんとするに止まり、それが基礎的内容を成す所の絶對的若くは眞實價值、即ちマルクスの價值の存在を明確に意識しなかつた結果は、言葉を換へて言へば、價值と交換價值とを識別しなかつた結果は、價值それ自身の本質は勿論、價值の表章形態、交換價值の本質をも充分に瞭らかにすることができなかつたのであるが、この彼れの態度は又、彼が價值範疇と價格(生産價格)範疇とを混同したことを意味してゐる。(註二) 即ち彼にありては、結局價值論は價格論に過ぎなかつたのである。彼が、一般的平均利潤率の法則の存在のために資本の組成に變化ある場合(異なる生産部門に於て)に於て、勞働のみを以て、貨物の相對價值を説明すること能はずして、遂に利潤、勞賃をも、價值構成要素として、勞働と相並んで

1) Marx, a. a. O., S. 23. (同譯本同冊四九頁)

2) Marx, a. a. O., S. 36. (同譯本同冊八〇頁)

認めざるを得ざるに至つたのは、彼れの相對價值の概念(隨つて又それが内容實體を成す所の労働の概念)に對する不満足なる態度、價值概念を價格概念と同一視する態度より來るものであつて、寔に當然の歸結であらねばならぬ。價值を價格と同視する限り、利潤、勞賃が價值構成に與かることは素より當然なのである。(註二)

(註一) このリカアドの價值概念と價格概念との混淆について、マルクスは左の如く云ふ。

『かくて彼は、商品の平均的生産價格は、その價值とは異なるものであると云ふべきであつた。然るに彼はかう云ふ代りに、この二つは同じものであるとした。而して彼は、斯様な誤れる前提の下に地代の考察に進んで行つたのである』¹⁾

(註二) リカアドにありては、貨物の自然價格(マルクスの所謂生産價格)は、彼れの交換價值即ち相對價值である。彼はかう言つてゐる。

『労働を貨物の價值の根柢となし、而してそれ等の生産に必要な労働の比較的分量を、相互交換に當つて與へらるゝであらう所の財の夫々の分量を決定する定規となすとは云へ、吾々は、該貨物の實際の價格即ち市場價格が、この價格即ち彼等の第一次的且つ自然的價格より、偶然的且つ一時的の偏倚をなすことのあるのを否定するものである、と考へられては困る』²⁾

『……然らば諸々の貨物の交換價值、即ち或る一貨物が持つてゐる購買力について語る場合には、吾々は、常に或る一時的又は偶然的原因によつて妨げられないならば、それが有するであらう所の力——即ち自然價格——を意味してゐるのである』³⁾

由來正統學派の労働價值論には、二つの立場若くは態度があると云はれてゐる。ヴィザア並びにホイテイカアに依れば、⁴⁾ その一つは哲學的立場であり、他の一つは經驗的立場である。哲學的立場とは、價值そのものの、固有的屬性とは何であるかを瞭らかにせんとする。純粹なる思索的立

1) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II, Teil I. S.16.

2) Ricardo, ibid. p. 65. (同譯本一三八頁)

3) Ricardo, ibid. p. 69. (同譯本一三五—六頁)

4) Wieser, F., Der Naturliche Werth, 1889. Vorwort III; Whitaker, A., History and Criticism of the Labour Theory of Value, 1904, pp. 12—5.

場を意味するものであり、經驗的立場とは、表面的に現はれたる現實の交換現象にありて、價值（價格）は經驗的に如何に決定せらるゝかを瞭らかにせんとする立場即ちこれである。而してマルクスが謂ふ所の現今經濟社會の内部的基本的關係、即ちその所謂生理學を研究せんとする立場は、大體に於て、第一の立場に當り、彼が謂ふ所の市民社會の外部的、實際的現象形態を研究せんとする立場は、ほぼ第二の立場に當るやうである（勿論正確には同じではないが）。

ところでこの二つの態度を價值論に取り入れたのがアダム・スミスであるが、彼はこの二つの態度の正當なる立場を理解することが出來ずして、即ちこの二者の密接なる關係を認識することができずして、現今の經濟社會（資本蓄積せられ、土地占有せらるゝ社會）に於ける價值論に於ては、結局彼はたゞ主として所謂經驗的立場に終始し、所謂哲學的立場に就ては顧みるところが尠かつた。

しかるにリカードは、貨物の現實の交換關係の基本的本質を成すところの勞働價值を研究することにより、市民社會（現今の經濟社會）に於ける財貨交換の原理、價值法則の本質を瞭かにせんとしたのであるから、彼はこの二つの立場の融合一致を企てたるものであつて、それは寔に歴史的に重要な意義を有つてゐるものであると云ふことが出來るのであるが、しかし乍ら猶ほ、彼は、この二者の關係——或は單に價值と價格との關係と云つてもよい——に就て、充分なる思索と考慮とを缺いてゐたのである。而してマルクスに至つて甫めて、この二つの立場——一は交換關係の本源、價值の基本的屬性、即ち資本主義的社會の内部的關係を研究の對象とするもの、他は現實の交換關係、價格現象、即ち資本主義的社會の外的現象を研究の對象とするもの——はそ

1) cf. Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II, Teil I. S. 1—5.

の實決して矛盾撞着するものではなく、後者の目的とする所のものも、結局前者の目的とする所のものが克く理解せらるゝことによつて、初めて瞭にせらるゝものであるとせられて、各々その本質および相互の關係が明確に指示せられたのである。

要する所、リカアドの勞働價值論は、現實の交換關係若くは價格現象をよく説明することができずして、遂にそれに一種の制限乃至修正が加へらるゝに至つたのであるが、このことは、彼が研究の方法に於て、猶ほ個人的自然科學的立場を脱する能はず、經濟價值としての勞働價值の本質を克く把握することができなかつた結果、彼が價值概念と價格概念とを混同したことに由來してゐるを見るべきであり、更に溯りては、資本主義的生產方法の歴史的特質を理解することが出来なかつた彼れの態度に、その基本的原因を見出すべきであると云ひ得らるゝのである。

さは言へリカアドの勞働價值論は、從來の勞働價值論の何れよりも優りたるものであり、後に至つて發展完熟したる所の勞働價值論の大體の構造は勿論、そが有する特異の諸點の萌芽も、已に臚げながら、彼れの價值論の裡に見出すことができるのである。

從來のリカアド價值論批評の多くは、否殆んど全部は、リカアドの勞働價值論を以て、一般的に勞働よりして價值を説明せんとする試みの結局失敗に終るべきことのよき例證として、常に擧げることゝを忘れない。しかし乍ら彼等は、勞働價值論を、隨つて又リカアドの價值論の真相を、よく理解せるものであると云ふことができないのである。(完)

【正誤】 本誌前號第一三二頁六行目の終りから、八行目の中程に至る迄の箇所は、左の如くあるべきを、前後組違ひになつた。こゝに訂正して置く。

『……代表者と認むるに不可はないであらう。(註) 正統學派に於けるその他の學者、例へばデニムス・ミル、マルサス、マカロツク、シニオア、タランス、デニイ・エス・ミルなども、……』